抑うつの世代間伝達　―親の抑うつに対する子どもの認知およびケア行動に注目して―

氏名　　佐藤　みのり

本論文は，親から子どもへと抑うつが世代を超えて伝達する「抑うつの世代間伝達」のメカニズムについて，親の抑うつに対する子どもの認知およびケア行動に注目して検討を行った。

まず，研究 1 で，抑うつの世代間伝達における親の抑うつに対する子どもの認知の媒介効果を検証した。親の抑うつに対する子どもの認知は，抑うつの世代間伝達において媒介要因となることが先行研究において示唆されながらも，その検討は十分でなかった。これをふまえ，縦断研究により因果関係の検討を行った。児童期後期の子どもとその父親ならびに母親，計 135 世帯を対象として，質問紙調査を行った。その結果，Time 1 での子どもの抑うつを統制したうえで，Time 1 の父親の抑うつは，Time 1 の父親の抑うつへの対処効力感に関する子どもの認知を媒介し，Time 2 の子どもの抑うつを予測することが明らかになった。一方で，母親の場合では，Time 1 の母親の抑うつは，Time 1 の母親の抑うつの重症度と慢性性に関する子どもの認知と関連していたが，Time 2 の子どもの抑うつへの影響性は確認されなかった。なお，父親の場合と母親の場合の双方において，Time 1 の親の抑うつから Time 2 の子どもの抑うつへと至る，直接の影響性は確認されなかった。以上から，児童期後期の子どもとその父親において，父親の抑うつが，父親の抑うつへの対処効力感に関する子どもの認知を媒介し，子どもの抑うつへ至る伝達メカニズムが明らかになった。

次に，研究 2 で，親の抑うつと子どもの抑うつを含む精神的健康との関連における，子どもの認知およびケア行動の媒介効果を検証した。親に対する子どものケア行動の過剰が，子どもの抑うつを引き起こす可能性については，主に社会福祉領域の先行研究が言及しながらも，そのメカニズムは実証的に明らかにされていなかった。そのため，うつ病の診断を受けた親と，思春期・青年期の子どもを対象とした質問紙による横断調査により検討を行った。想定された，親の抑うつに対する子どもの認知→子どものケア行動→子どものケア行動の影響に関する認知→子どもの精神的健康のパスについて検討した結果，親の抑うつに対する自責感と，親の抑うつの慢性性と重症度についての子どもの認知が，子どものケア行動に関連し，さらに子どものケア行動による肯定的影響の認知を媒介して，子どもの向社会性へと至る関連メカニズムが明らかになった。一方で，親の抑うつに対する自責感と，親の抑うつの慢性性と重症度についての子どもの認知は，子どものケア行動に関連し，さらに子どものケア行動による否定的影響の認知を媒介して，子どもの情緒の問題へと至るとの関連メカニズムが明らかとなった。

研究 3 では，抑うつの世代間伝達事例における，子どもの親の抑うつに対する認知およびケア行動の生起ならびに増幅のプロセスを検討した。そのために，抑うつの世代間伝達が発生した事例について，子どもの，親の抑うつをめぐる体験と自らが抑うつ症状を呈し抑うつ関連疾患を発症するまでについての語りを分析した。その結果，子どもは，うつ病の親や家庭の危機を認知することを契機とし，家庭の危機的状況における対処方略行動としてケアに従事し，その量や担う責任を徐々に増大させながら，心理社会的不適応を呈するに至ることが明らかになった。また，うつ病の親の自傷行為・自殺未遂，両親の不和を目の当たりにしないこと，子どもが親のケアに関する責任を背負い込まないこと，子どもが助けを必要とした時に適切な窓口において子どもが相談できる場合には，子どもが抑うつ関連疾患を発症するプロセスを断つことができる可能性が示唆された。

最後に，研究 1 から研究 3 により得られた知見を踏まえ，うつ病の世代間伝達の発生を抑止するために，親の抑うつに対する子どもの認知を現実に即した適切なものとして形成するための介入として，抑うつならびにうつ病の親を持つ子どもに対する早期段階での心理教育の重要性を論じた。また，抑うつならびにうつ病の問題を抱える親を持つ子どものケア行動を詳細に把握し，行政，医療・福祉，教育の各領域が情報を共有したうえで，必要なソーシャルサポートならびにケアを導入することにより，子どもを含む家族全体を包括的に支援することを目的とした環境づくりを推進する必要性を考察した。